

取扱注意 Ver. 10-1

習志野文化ホール再建設に係る基本構想（案）

令和4年〇〇月〇〇日

習志野市

目次

1. 基本構想の背景	1
(1) 背景	1
(2) 沿革	1
(3) 市の取組み	2
2. 基礎的条件の整理	4
(1) 市民の意向	4
(2) 現文化ホールの運営状況及び備える権利	4
(3) 現ホール及び類似施設に係る調査結果	4
(4) 基本方針	5
3. 施設計画の検討	6
(1) 現習志野文化ホールの施設	6
(2) 課題の解消・改善	8
(3) 現水準の保持～現ホールの評価が高く同程度の水準の整備が求められる項目	11
(4) 多機能ホール化	12
(5) 電気設備・機械設備の全体建物計画を考慮した検討	13
(6) 引き続き検討が必要な事項	15
(7) 防災機能	18
4. 敷地候補地の検討	次回以降の検討専門委員会で提示いたします。
5. 事業手法の検討	次回以降の検討専門委員会で提示いたします。

1. 基本構想の背景

(1) 背景

習志野文化ホールは、昭和 45(1970)年に制定された習志野市文教住宅都市憲章の下、文化芸術の殿堂、市民の文化活動の場として、昭和 53(1978)年に竣工しました。旧第一中学校移転後の跡地の処分を含めた、国電津田沼駅南口開発事業計画は、本市の表玄関における文化・商業の核となる事業であり、この開発事業の中心をなす本ホールは、市民による募金運動や企業の支援にも支えられる中、当時の価格で 26 億 4890 万円を投じて第 3 セクター方式により建設されました。

市民生活を豊かにする施設として、本ホールは建設当初から市民による学校利用及び団体利用を主としており、それが現在まで本市の文化芸術活動の質の高さに大きく寄与しています。

市立小・中学校や習志野高等学校における全国水準の音楽活動を育んできたことをはじめ、芸術祭や市民文化祭、習志野第九演奏会などの市民の文化・芸術活動の醸成・発表の場として、現在に至るまで、本市の文化芸術活動の重要拠点として多くの市民に親しまれ続けている施設です。

また、成人式など市民の人生の節目を飾る行事の場であるとともに交通結節点である JR 津田沼駅直近の立地による本市来訪者による交流人口の創出はもとより、超高齢社会においては、市内外を問わず、文化、芸術活動への参加や堪能にいそしむ高齢者の貴重な活動拠点としての効用や“音楽のまち習志野”としてのシティセールスの展開等、多岐にわたりまちづくりに貢献しています。

(2) 沿革

昭和 46 (1971) 年	11 月	国電津田沼駅南口 (旧第一中学校跡地) 開発事業計画を公募
昭和 48 (1973) 年	2 月	フジタ工業 (株) の提案計画に決定
昭和 51 (1976) 年	3 月	習志野文化ホール財団設立認可
昭和 52 (1977) 年	12 月	ホール建設着工
昭和 53 (1978) 年	12 月	開館記念式典 (21 日) で国立音楽大学教授 (当時) 吉田實氏によるパイプオルガン演奏。曲目は、J. S. バッハ「フーガ変ホ長調 BWV552」他 第九 (指揮: 伴有雄、演奏: 習志野フィルハーモニー管弦楽団、合唱: ならしの第九合唱団) 演奏 (24 日) 同追加演奏会 (26 日)
昭和 54 (1979) 年	1 月	開館記念 NHK 交響楽団特別演奏会
	9 月	六代目三遊亭円生ローズルームで口演直後急逝 (その後、ホール入口に終焉の地碑建立)

昭和 63 (1988) 年	12 月	開館 10 周年記念「パイプオルガンとマンドリンの響き」
平成 7 (1995) 年	3 月	メロディー基金創設
平成 8 (1996) 年	8 月	バックステージツアー開始・アーツニュース創刊
平成 9 (1997) 年	2 月	シンボルマーク制定
	3 月	市民創作ミュージカル「VIVA 谷津干潟」公演
	7 月	アーツアソシエーツ（友の会）発足
平成 11 (1999) 年	3 月	開館 20 周年「オペラ・ガラコンサート」
平成 14 (2002) 年	6 月	大規模改修、耐震工事（併せてバリアフリー化、音響等舞台設備更新）。3 か月休館後リニューアルオープン
平成 15 (2003) 年	4 月	サンペデックホール運営開始
平成 16 (2004) 年	7 月	施設・設備使用料金改定
平成 17 (2005) 年	11 月	ダイエーサンペデック店撤退
平成 19 (2007) 年	12 月	第 30 回記念第九演奏会
平成 20 (2008) 年	3 月	商業施設モリシア津田沼オープン
	12 月	文化ホール開館 30 周年第九演奏会
平成 23 (2011) 年		東日本大震災復旧工事
平成 24 (2012) 年	4 月	財団法人習志野文化ホールが公益財団法人へ移行
平成 27 (2015) 年	4 月	文化ホールが習志野市の所有となる
平成 30 (2018) 年	1 月	大規模改修工事（約 1 年間休館）
	12 月	文化ホール開館 40 周年
平成 31 (2019) 年	1 月	リニューアルオープン
	1 月	40 周年記念「第 41 回習志野第九演奏会」
	2 月	40 周年記念「創設・習志野シンフォニエッタ第 1 回演奏会」
	3 月	40 周年記念「魅惑のオペラ&オペレッタの饗宴」

（3）市の取組み

市制施行 60 周年を迎えた平成 26 (2014) 年、習志野市は 12 年間にわたる長期的な市政指針である新たな「習志野市基本構想」に基づいたまちづくりをスタートしました。

令和 2 (2020) 年に本計画期間の後半 6 年間に当たる後期基本計画がスタートし、自立的都市経営を推進しつつ、魅力あるまちづくりを進めています。基本構想及び後期基本計画では 3 つの目標の一つに『育み・学び・認め合う「心豊かなまち」』を位置づけ、「生涯にわたる学びの推進」として市民一人ひとりがそれぞれの目的や志向、ライフステージ等に応じて、学習・芸術・文化などの活動を行う「生涯学習推進のまち習志野」の実現を目指しています。

令和 3 年度にスタートした習志野市文化振興計画においては、習志野文化ホールは、芸術祭や市民文化祭、第九演奏会などの市民生活を豊かにする文化芸術活動の場であり、また、成人式など市民の節目を飾る行事や交流の場として、市民の福祉増進を図り、身近なところ

で芸術を感じることができる文化芸術の重要拠点として、多くの市民に親しまれ続ける施設と位置付けており、「音楽のまち」を象徴する施設として、音の響きを重視した誰もが利用しやすい習志野文化ホールの再整備に取り組むこととしています。

現在、当該地の地権者である民間事業者と市、国において、JR 津田沼駅南口再開発の検討が開始されています。その中で開発区域に含まれる民間商業施設の一部に位置し、老朽化が進むとともにバリアフリーや使いやすさ等、現在求められる仕様に問題を抱える習志野文化ホールについても建替えに向けた検討が必要となっています。

これらのことから、今後の再整備にあたっては“文教住宅都市”習志野のシンボルとして、習志野文化ホールの在り方の課題を整理、分析、検討し、再建設に係る基本方針及び施設に関する課題を整理し、再建設に係る基本構想を策定するものです。

2. 基礎的條件の整理

(1) 市民の意向

後期基本計画の策定に際し実施した市民意識調査（平成 30(2018)年度）の結果では、過去に習志野文化ホールを利用したことがある市民は7割以上にのぼり、現在と同程度の客席数を望む意見が約5割となっています。また、記述意見では「“音楽のまち習志野”として利用しやすいホール」、「客席数にこだわらず音のよさや座り心地のよさなど特徴のあるホールがよい」、などが寄せられています。

文化振興に関する市民意識調査（令和元(2019)年度）では、習志野文化ホールについて期待する役割としては、文化芸術の鑑賞・発表機会の充実が6割、今後力を入れたらよいと思う取り組みとしては、誰もが利用しやすいホールや劇場の整備が4割超となっています。また、記述意見では「市民、特に小中高生たちが音楽、舞踊、演劇など本物に触れる機会を作って欲しい」、「駅から近くて良い」、などの意見が寄せられています。

個別の関係者・利用者ヒアリングにおいても、「市民利用中心であっても、ホールの仕様を落とさないでほしい」「音楽の響きを十分良いものとなるように現状を維持してほしい」という意見が多く、事業費の圧縮で単純に仕様を落として音の響きが損なわれるホールにならないよう、事業費と文化水準のバランスをとる必要があります。

(2) 現文化ホールの運営状況及び備える権利

JR 総武線の直近、中規模クラスの多目的ホールであり、近年の稼働率は7割以上（令和元年度 77.5%）であり、その6割以上が学校、文化団体など市民利用となっています。近年の平均的な運営に投じている予算の平均は、約 148,000,000 円となっています。

関係者ヒアリングでは、千葉県内に駅近の当該規模のホールが無く、交通結節点である JR 津田沼駅前という立地が魅力的な興行の誘因要素であること、市民公演においても市外からの来客が広域に呼び込める交通利便性が有るとの意見の一方、旧庁舎跡地で市役所とまとめて文化のコアを作ってはどうか、まだホールとして使えるにもかかわらず商業施設と合築のため建替を検討しなくてはならないため長期的見地では土地を持ち単独のホールを建てたほうが良い、との意見も寄せられています。

本市は当該地に土地を所有しておらず、約 300 m²の借地権と約 2,100 m²の使用借権を持ち、建物においては約 7,000 m²の区分所有権を有しています。現時点（令和3年7月現在）における区分所有権者は、本市を含め2名のみ、本市の所有面積は全体の約7%となっています。

(3) 現ホール及び類似施設に係る調査結果

平成 30 年度に文化ホール及び類似施設調査を行いました（資料参照）。これに基づく考察に掲げられた、新ホールの想定される施設像・方向性を鑑み、基本方針を定め、施設計画（課

題の解消・改善、現水準の保持、多機能ホール化、引き続き検討が必要な事項等)を検討します。

その際、調査で試算された概算建設費では、別途備品・別途工事費を除き、新築単独施設で80万円/㎡、複合施設事例で118万円/㎡(税別)が算出されております。このことから、100億円規模にのぼることも想定される本事業を実施するには、あくまでも概略での試算ではありますが、多額の一般財源の支出と、その後、長期にわたり毎年数億円規模にのぼる債務の償還が想定され、本市の行財政運営においても、大きな影響が見込まれます。

(4) 基本方針

習志野市文教住宅都市憲章に基づき「教育に力をそそぎ、すぐれた文化をはぐくむ」べく、“音楽のまち習志野”を象徴する施設として再建設します。

その際、**音の響きを重視した多目的ホールとして約1,500席の**、市民の文化活動を支える誰もが利用しやすい施設を目指すとともに、本市基本構想における自立的都市経営の推進、持続可能な財政構造の構築を踏まえ、将来世代に過度な負担を先送りしないよう、**事業費の圧縮**に努めます。

施設の構成や機能・規模の決定に際しては、バリアフリーをはじめとする習志野文化ホールが抱えている問題点や課題を解消することに加え、現在の利用状況をそのまま踏襲するのではなく、どのような展開をしていくのかを考慮し、将来にわたり市民の文化芸術活動や観客が育っていくこと、新しい時代を先読みした検討を行うことが必要です。これにより、ホール機能や付随する練習室などの諸室、イベントホールなどの機能や規模についても決定していくことが可能となります。

この基本構想の段階では、舞台設備や諸室について、費用や複合施設とする場合は関係者との調整をしなければ仕様が決定できないため課題が残りますが、事業の内容や上演演目、年間スケジュール等において何が一番必要なのか、何を優先するのか、どのようなコンセプトのホールにするかを決め、どの程度の要求を整備に求めるかを決断することが大切です。

習志野文化ホールは、設立以降、多くの市民が多様に使えることを基本としており、特定の演目に特化した専用ホールを整備するものではありません。しかし、これまでの当ホールが持つ“音の響きを重視した多目的ホール”を維持することを基本方針としており、音響には十分配慮しつつ、全てにおいて中途半端なホールとならないように議論を重ねることが必要です。

これらをふまえ、現ホールより一定程度延べ床面積が拡大することが想定されますが、第2次公共建築物再生計画にもある通り、公共施設の総量圧縮の考え方にも配慮し、検討を進めていきます。

また、配置については駅からの距離を近くしたいとの要望がありますが、日影の規制や費用なども考慮し、利用者及び搬入動線に十分配慮したうえで、プランの検討を進めていきます。

3. 施設計画の検討

- ◆施設計画を進めるにあたっては、市民や利用者、市等の意見を反映させるとともに、ここに記載されていない事柄を含め、十分な比較検討を行い決定していくこと。
また、複合施設や駅前広場等との繋がりを大切にし、まちづくりとしてのコンセプトも反映させる必要があります。

(1) 現習志野文化ホールの施設

建物概要

所在地 : 習志野市谷津1丁目16番1号
延床面積 : 9,903㎡ (ホール部分は7,083㎡)
竣工年 : 1978年

表1 ホールの設備

舞台	プロセニウム間口	m	19.0
	奥行 (框～ホリゾント幕)	m	16.0
	高さ (スノコ下)	m	21.9
	上手袖幅	m	8.8
	下手袖幅	m	14.3
装置	音響反射板		あり
	オーケストラ迫り		あり
	客席ワゴン		あり
	大迫り		なし
	小迫		なし
	花道		あり
	(固定・仮設)		固定
	照明バトン／ブリッジ		サスバトン
	本数	本	5本 (内1本、バックサスバトン)
	吊物 電動／手動		電動＋手動
	昇降ティザー／プロセブリッジ		なし
	可動ウィング		なし
	吸音幕・カーテン		なし
	残響可変装置		なし
客席間仕切り装置		なし	
その他		パイプオルガン	
附属	リハーサル室	室	1

	楽屋（大）	室	1
	楽屋（中）	室	2
	楽屋（小）	室	3
	合計人数	人	90
搬入口	搬入階	階	1
	（舞台階）	階	5
	トラックサイズ	t	4
	（台数）	台	1
	搬入用EV台数	台	1
	①積載重量	t	2.2
	間口	m	4
	奥行	m	2.2
	高さ	m	3.7~5.5
客席	1階席	席	1,475
	車椅子席（常設）	席	
	最大席数	席	12
	減客席	席	18
	親子室数	室	0

※別棟同敷地に民間所有のイベントホール（モリシアホール）と市役所の連絡所有り



(2) 課題の解消・改善

ア、バリアフリー化等、誰もが使いやすい施設のあり方

築40年以上が経過する現施設では、今日の基準に比べ、バリアフリーやユニバーサルデザインへの対応が十分でないことが最大の課題です。施設利用者に対するヒアリングにおいても、改善の要望が多く寄せられています。

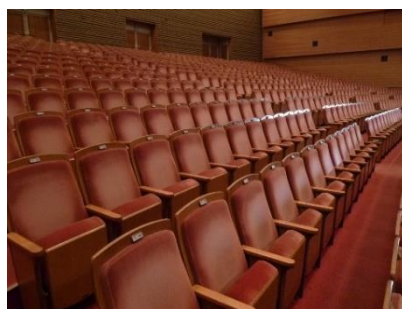
具体的には客席側（客専用）のエレベーター等の設置により、駅から車いすの利用者が一人でホールへスムーズに入場できる動線を確保することや、ホワイエが現状のようにホールの下階に位置する場合には、ホールに着いてから客席までのエレベーターやエスカレーター等の設置、難聴者用ループコイルの継続設置、客席の勾配を現状よりもきつくしないことなどが挙げられます。これらを踏まえ、客席の形状を検討する必要があります。

トイレに関する要望も多く、トイレの数の増設やオストメイト対応、子供用トイレ、親子用トイレ、多目的トイレ、おむつ台の設置などが有ります。また、ホールの各出口からトイレまでの距離についても、近くしてほしいという意見があります。

その他には、こども連れでも気軽に来場できるように、授乳室や親子室の設置など最新の基準に準じた仕様、設備で新設することが求められており、これらについて基本計画で検討していきます。

イ、座席の改善

座席の前後間隔が狭く座席数を削減してでも間隔を広げた方がよいという意見や、舞台を見やすいように前後の座席の配置を互い違いにしてほしいという意見もあります。現施設と同様の席数での整備を目指すことから、客席数を減らさずに近年標準となっている座席間隔へ広げ、かつ延床面積の大幅な拡大も抑える検討をする必要があります。



座席形状は、2階席を設けた場合に音の響きが悪い席が生まれること、天井が高くなり空調等のランニングコストにも差が出ることから、現状と同形式のワンスロープとします。

また、長時間の公演であっても快適に過ごせるように、座席の質についても検討していきます。

表2 客席方式に係る比較検討表

	ワンスロープ	2階席（庇）	2階席（バルコニー）
メリット （費用面）	・2階席を造るより、共用部やEV等の設備が圧縮され工事費を抑えられる可能性が有る。	・水平投影面積の圧縮により、下層階の取得面積が減り、負担額を抑えられる可能性が有る。	・水平投影面積の圧縮により、下層階の取得面積が減り、負担額を抑えられる可能性が有る。
（利用面）	・現ホールと同じ形式で、移行し易い。 ・動線が複雑になりづらく、観客の誘導や管理がしやすい（利用団体からの要望あり）。 ・客席に現在と同程度の傾斜がつけやすく、前の観客を気にすることなく鑑賞できる。	・全席開放以外の利用形態を作りやすく、中小規模団体の利用がしやすくなる。 ・後方の席からも、一定の視認性を確保できる可能性が有る。	・全席開放以外の利用形態を作りやすく、中小規模団体の利用がしやすくなる。 ・後方の席からも一定の視認性を確保できる可能性が有る。 ・2階席（庇）とするよりは、音の響きに影響が少ない。
デメリット （費用面）	・水平投影面積が広く、下層階の取得面積増により、負担額が増加する可能性が有る	・ワンスロープより、共用部やEV等の設備が増加し、工事費が高くなる可能性が有る	・ワンスロープより、共用部やEV等の設備が増加し、工事費が高くなる可能性が有る
（利用面）	・後方の席からの視認性が悪くなる。 ・席の間隔を広げ、ホール全体が広くなり、2階席を造る場合と比べると音の響きが悪くなる可能性が有る。	・庇の下に音の悪い席ができる可能性が有る。 ・総高さを抑えるためには、1階席の傾斜が緩くなり、前の観客が気になる可能性が有る。	・共用部の増加の割に、席数が見込めない。 ・総高さを抑えるためには、1階席の傾斜が緩くなり、前の観客が気になる可能性が有る。 ・見切り席となる事例もある。
			

※設計を進め、比較検討を行わないと現時点では不明（どちらにもできる）な点が多いことから、「可能性が有る」という表記としている。

【参考】客席からの舞台の視認性について

客席からの視認性に係る基準として、演劇やバレエ・ダンスなどの演者の表情・手足の動きなどが見える範囲である「1次許容限度（2.2m）」、一般的な身振りが見える範囲である「2次許容限度（3.8m）」が存在する。舞台の重心（中心）から客席の最後尾までの距離の他ホールの事例については右の表のとおりである。

※寸法の記載がある断面図のあるホールのみ。一部図面を実測して算出しているため概算値。平面上で計算

-舞台の重心（中心）から客席の最後尾までの距離-

施設名称	舞台距離	座席数等
習志野文化ホール	40m	1階（1475席）
都城市総合文化ホール	42.5m	2階（1461席）
いわき芸術文化交流館アリオス	47.3m	4階（1705席）
上田市交流文化芸術センター	37.5m	3階（1002席）
観音寺市民会館	35.8m	2階（1200席）
ロームシアター京都	37m	4階（2005席）

ウ、搬入出口の改善



搬入出は、舞台に直接搬入出できることが理想ですが、現施設のように舞台レベルが上階に配置されている場合は、エレベーターでの搬入が条件となります。

搬入エレベーターのサイズも当然のことながら、搬入出口にアクセスできるトラックサイズ、重量、台数などが使いやすいホールかどうかが判断材料となります。

市内の学校利用に限ると4tトラックでの搬入出が主となるため、最低限4tトラックの搬入に対応できるようにすることが必要となります。

ただし、近年のポップス系コンサートなどでは11tトラック複数台での搬入出が一般的であるため、11tトラックが搬入口に入ることができ、荷台後方からの積み下ろしができることが理想となります。過去の実績からは、複数台での搬入を行うことがあることから、11tトラックを最低2台停め置けるスペースを確保することとします。

雨天を想定して荷下ろし場所に庇等を設けることは最低限必要であり、夜間の積み降ろしもあることから騒音問題などを考慮し、屋内に荷物の積み下ろし場を設けるか、住宅地側に積み降ろし場を設けないなど配置を検討する必要があります。併せて、搬入を円滑に行えるように、荷台とエレベーターの高さを合わせたホームの設置も検討し基本計画において定めます。

また、店舗用駐車場入口と搬入出口が近接すると、お互いの車両が混雑した際に影響が出る可能性があるため配慮が必要です。

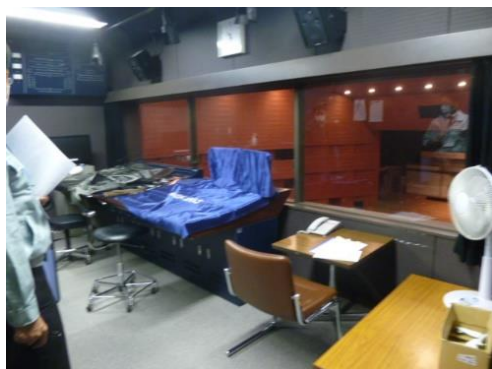
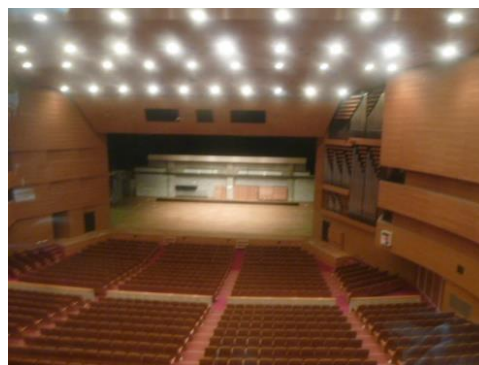
エ、新しい生活様式

新型コロナウイルス感染症が終息した先を見据え、新しい生活様式に対応したホールの在り方（座席間隔や換気機能等）を検討する必要があります。その際、（公社）全国公立文化施設協会策定の劇場、音楽堂等における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドラインをはじめとした、劇場等に関するガイドラインを参考とします。

(3) 現水準の保持～現ホールの評価が高く同程度の水準の整備が求められる項目

ア、音響設備

現状のホールの音響の水準は利用者から高い評価を受けています。ここでいう音響とはアコースティックの響き“建築音響”のことであり、ホール全体の空間設計によって音の響きを最良にするもので、基本方針の通り“音の響きを重視”し、現ホールと比べ遜色ないレベルになるよう検討する必要があります。そのために、ホールの音響設計を多く手掛けた実績のある設計事務所等に監修を依頼す



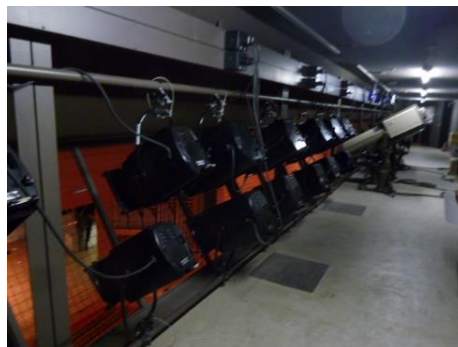
るなどの手法は必須と考えられます。ヒアリングでは、残響時間だけではなく内装の素材に対する意見も多く、コンクリート剥き出しや、石の仕上げは不評で、現在のホールのように木の仕上げを望む声が多く挙がりました。

なお、機材による音響は利用形態により必要なものが変わってきます。現ホールでも機材により使用頻度に大きな差があるため、どこまで整備するのか基本計画において検討していきます。

イ、照明設備

照明設備の水準は十分なもので、同等の設備を設置する必要があります。既存の照明が老朽化し継続利用が難しいことから、LED 照明へ変更します。

ヒアリングにおいては、舞台上の温度が上がらない照明にしてほしい、舞台の照度を上げたい、色々な色を使いたい、客席が暗いなどの意見が見られます。



ウ、舞台装置（パイプオルガン、オーケストラピットを除く）

舞台装置は最新施設と比較しても遜色ないレベルであり、同水準の舞台設備を整備しますが、舞台の袖や舞台裏のスペースについて、広くしてほしいという利用者の意見もあることから、基本計画において検討していきます。



（４）多機能ホール化

舞台装置の現状レベルを保持したまま、さらに使い勝手の良いホールにすることも検討し、現状の多目的ホールを更に機能的に向上させた“多機能ホール”を目指すことも考えられます。

具体的には、反射板の吊り位置や照明ブリッジ等、既存設備や機構などにおいて、今後、詳細な検討を行っていきます。

しかしながら、このことは機能向上とともに費用の増大を意味し、市民利用中心である以上、想定利用頻度や現施設の水準と比較し慎重に検討し、基本計画で明らかにしていきます。

(5) 電気設備・機械設備の全体建物計画を考慮した検討

ア、共通事項

- 1) バリアフリーに配慮し客席の位置により、観客用エレベーター等を設置します。また、舞台装置・機材運搬用に搬入用エレベーターを設置します。
- 2) 施設の今後の維持管理において、予防保全に配慮した計画とし、中長期的な施設整備についても基本計画で検討していきます。
- 3) 環境に配慮し積極的な断熱性能の向上や省エネルギー化・節水に取り組みます。
- 4) 自動制御設備などは十分に実績のあるものを採用し、メンテナンス頻度の低い設備を採用します。また、維持管理コストについても十分検討します。
- 5) 設備配管の位置は可能な限り集約し、上下階の設備スペースはそろえる計画とします。漏水時の影響を考慮し、当施設の設備配管が他施設を通らないように配管経路を計画します。パイプシャフトは専有とし、当施設エリアから中に入れるよう計画します。
- 6) 音に対する配慮が必要なホールについては、機械室等からの騒音・振動や吹出口の風切音などに十分配慮した計画とします。
- 7) 楽屋、トイレの整備については各階に車いす対応トイレを設け、高齢者及び障がい者等の利用に配慮した計画とします。また、トイレの数について待ち時間に配慮した計画とします。
- 8) 楽屋エリアにも給湯室・シャワーやトイレ等の衛生設備を設けます。
- 9) 基本的にホール・居室等は空調設備を設け、運営方針によって空調エリアを分ける計画とします。楽屋については、個別に空調温度の調整ができる仕様を求める意見も出ています。
- 10) 各施設部分の必要とされる機能を分析し、均等のとれた利用計画とします。
- 11) 将来の施設機能、需要等の変化にも柔軟に対応できる計画とします。
- 12) 複合化施設となる場合は、各設備の利用区分や管理区分について、できるだけ明確に分け、設備ピット等の配置をよく検討し基本計画で定めていきます。
- 13) 舞台設備の性能は現状と同等を維持しつつ、電気設備と共に環境に配慮した省エネルギー仕様の設備を整備します。
- 14) 舞台設備機器は十分に実績のあるものを採用し、メンテナンス頻度と維持管理コストの低い設備を採用します。
- 15) 大型設備の更新工事用の搬出入ルートを整備します。
- 16) 客席から控えの演者や舞台設備等が見えないよう袖幕等の配置をします。
- 17) 防犯用の監視カメラを設置します。
- 18) 控室・リハーサル室への舞台確認用のカメラや演者用の連絡設備を設置します。

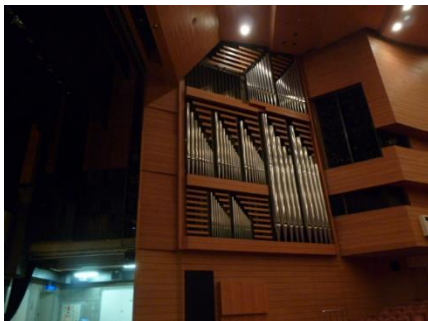
イ、その他の整備について

以下については、別途行われる建物全体の設計との調整を図りつつ、新文化ホールの想定規模(配置・ホール数・人数・面積・容積・階層等)にあわせて基本計画で定めていきます。

- 1)給排水・ガス等の引込(建物で共有とするか、専用引込か)
- 2)雨水処理施設の配置・規模
- 3)機械室の配置
- 4)重量機器の設置場所
- 5)空調換気システムの構成(ホール等大規模空間について検討)
- 6)給排水システムの検討(ホールの配置(地上からの高さ)に合わせて検討)
- 7)電力線及び各種通信線等の引込(建物で共有とするか、専用引込か)
- 8)非常用電源(発電機)の配置・規模(建物共有の可能性はあるか)
- 9)電気室・ミキサー室・スポット室の配置と数
- 10)調光盤・アンプ等の設置場所
- 11)舞台設備の構成(現状と同等で検討)
- 12)持ち込み設備用コンセント・固定金具等の配置検討(現状のニーズに合わせて検討)

(6) 引き続き検討が必要な事項

ア、パイプオルガン



現在のホールに設置されているパイプオルガンは、旧西ドイツのベッケラード社の製作で、3, 524本のパイプを備えており、建設当時の価格で約1億円をかけて設置されたもので、千葉県内のホールでは唯一の設置となっております。

現状の使用頻度は年間29回程度（内、本番使用13回、演奏披露9回）であります。

関係者ヒアリングにおいては、再設置について、かなり意見が分かれており、利用頻度の低さを理由に無くすことは、音楽への冒瀆である、文化とはそういうものではない、といった再設置を強く求める意見の一方で、飾っておいても仕方がない、これにお金をかけるより使用頻度の高い良いピアノを入れた方がよい、公費が入っている中で少ししか稼働していなければもったいないといった意見があり、音楽のまち習志野、わがまち、ホールの“シンボル”である、といった考えからも、音楽に携わっている、いないに関わらず、見解は二分されている状況でありました。

メンテナンス事業者へのヒアリングでは、これほどの規模のパイプオルガンの移設は国内でも過去に例がないのではないかと、とのことであり、解体・設置作業にはドイツからベッケラート社の技術者を招聘し、対応することが必須であること、保管にあたってはパイプは非常に柔らかい容易に曲がってしまう金属であることから、変形を防ぐため、立てて保管する必要があること、長いパイプは6m程度あり、さらに、木製の部分は湿度管理を要するとのことであります。

保管については、天井高さが6mを超す倉庫の確保は非常に難しく、メンテナンス事業者が所有する倉庫での保管は現段階では困難であり、保管可能な外部倉庫の確保の他、市内の公共施設での保管についても検討が必要です。

費用においては、解体、オーバーホール、再設置、調整、一部部品交換の対応で、約1億2千万円、これに保管費を上乗せすると合計で約1億5千万円の見積もりが示されており、財源確保が最大かつ困難な課題であり、継承に特化し、目標金額を設定するクラウドファンディングの実施なども検討が必要です。

イ、附属施設

現在、リハーサル室は楽屋エリア内にあるため、練習等の用途として単独での貸し出しができません。また、展示施設としてギャラリーはありますが、現状の稼働率はさほど高くなく、隣接するモリシアホール（民間施設：イベントホール）を利用する場合があります。



施設を検討していく際には、ホールのみにて特化していくのか、施設全体として諸室をどのような構成とし、市民の文化芸術活動の施設についても一体的に整備していくのか等、市内の公共施設マネジメント等の視点でも検討し基本計画で定めていきます。

その中で、リハーサル室や練習室については、既に単独での貸し出しの要望が有り、より大きなリハーサル室を求める声も多くあることから、設置すれば需要かつ使用料収入による収益確保が見込まれる可能性が有ります。

また、文化芸術振興の観点から作品展示の施設の要望も根強くあることを含め、リハーサル室やギャラリーとして使用しないときは稼働壁等により間仕切り、不足しがちな楽屋や会議室としての使用と、収益を得ることの両面から検討が必要です。

尚、練習室等を多数配置するためには、床面積が現状よりも広く必要となることから、諸室の兼用化（多用途に利用できるようにする）を行い、面積の縮小に努めつつ、ゆとりある空間を持つことができるような検討も並行して行う必要があります。

また、イベントホールについては大ホールと連携可能で、かつ個別貸出しも可能なように民間と連携した整備を検討します。



楽屋については、男女別の大部屋、ソリストや指揮者用等の個室の設置や楽屋のメイクスペースで隣の人との間へのパーテーション設置を望む意見も挙がり、検討が必要です。

ウ、緞帳

現在は緞帳の利用頻度は一定程度あり、新ホールも多目的ホールとなることから、設置は必要との意見が多数であります。一方で、緞帳を使用しないホールが現在の主流であり必要ないという意見や、簡易的な幕で良いという意見もあります。

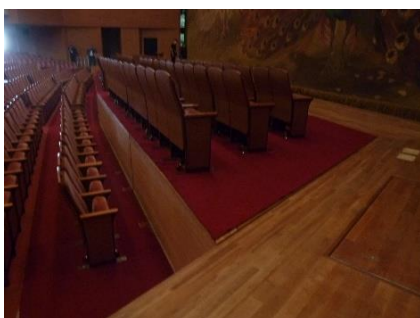
現在の緞帳は、本市出身の時田直善画伯の「祝舞」を原画として、建設当時で 2000 万円を投じ制作した西陣織のものですが、現緞帳の製作者へのヒアリングによ



ると、適切なメンテナンスがされれば、新ホールでの継続利用は可能であるとの回答を得ております。

再利用の場合は、プロセニウム枠の間口寸法が緞帳合わせになり設計の自由度が下がりますが、利用者ヒアリングにおいて拡幅に関する要望は無く、標準的な間口寸法は確保されていることから、新ホールでは、現在の緞帳を再利用することとします。

エ、オーケストラピット



直近5年間でオーケストラピットとしての利用はなく、客席スペースとして利用されていることが多いですが、迫りを上げて舞台を拡張するために使用することがあります。

また、舞台そのものについて、反射板までの奥行きを広げることができれば、迫出し舞台としても不要という意見も聞かれます。

床を上下するための機械室や、外した椅子を収納するスペースが削減できること、ランニングコストとして生じるメンテナンス費用がなくなることなどを勘案し、オーケストラピットは新ホールに設置しないこととします。

なお、舞台そのものの拡張について、基本計画にて検討していきます。

オ、ホワイエ

縮小した方が良いという意見がある一方で、簡易的な展示、観客の一時的なたまりや軽食をとるスペースとして使用されており、過度に面積を縮小すると用をなさなくなる可能性が有ります。

また、ギャラリーを兼ねたり物販を行うなど、今後の計画により多目的化することも基本計画で検討していきます。



その場合、ホールの観客とギャラリーの客の動線の交錯や、お互いの音の影響などが無いように配慮が必要です。

カ、ロビー

現状程広くなくてよいという意見や、少し削減しても良いという意見がある一方で、雨天時や観客の多く入る公演では入場前のウェイティングスペースや、チケット販売の為、現状程度のスペースが必要という意見もあります。新しい生活様式においては、入場前の密を避けることにも配慮が必要です。

キ、美術品等

現在ホワイエ等に展示されている絵画や彫刻等の美術品については移設が必要となります。

また、窓のステンドグラスやロビーの天井に使われているフレスコ画について、新ホールへ移設が可能か調査が必要です。

この他、エントランス前に設置されている、六代目三遊亭圓生碑についても移設が必要です。

ク、商業施設との関係

駅前の民間商業施設との複合施設として再建設を計画しており、文化ホールへの来客が複合施設全体の賑わいとなる事をはじめ、ホールと商業施設お互いの相乗効果を生むような動線計画について基本計画で検討していきます。

ケ、駐車場（一般客用）

現施設の駐車場は、複合商業施設用の741台がありますが習志野文化ホール専用の駐車場ではありません。駅前の立地であり、公共交通機関が充実しているため専用駐車場については整備の必要性を含め、検討を行い基本計画で定めていきます。

また、送迎時に使用する車寄せや、車寄せからホールまでのバリアフリーの動線確保も求められています。

コ、駐車場（団体客・利用者用）

現在、関係者の駐車場確保については、JR 津田沼駅南口第二自転車等駐車場の横に、習志野文化ホール管理用駐車場として10台分（乗用車のみ）確保しています。

この他、学校利用時のバスや搬入用トラック等の駐車場確保の必要性については、配慮が必要であるという意見が根強くあり、搬入用トラックについては11tトラックを最低2台停め置けるスペースを確保することとします。

（7）防災機能

現ホールは、災害時帰宅困難者の24時間以内の滞在所として活用されています。

引き続き、同様の要件を充足する必要があります。

4. 敷地候補地の検討

次回以降の検討専門委員会で提示いたします。

5. 事業手法の検討

次回以降の検討専門委員会で提示いたします。

習志野文化ホール再建設に係る
基本構想（案）

令和4年 月 策定

作成：習志野市政策経営部総合政策課

■電話：047-453-9222

■FAX：047-453-9313

■Mail：seisaku@city.narasino.lg.jp